

氏名（本籍）	タツミ 異	ミ 水	ユキ 幸（東京都）
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第114号		
学位授与年月日	平成15年3月25日		
学位論文等題目	作品「切り取られた風景」 論文「気配の感触」		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部） 戸津圭之介
（論文第1副査）	”	”	（ ” ） 佐藤道信
（作品第1副査）	”	”	（ ” ） 堀口光彦
（副査）	”	”	（ ” ） 宮田亮平
（ ” ）	”	助教授	（ ” ） 橋本明夫

（論文内容の要旨）

「もの」が湛える気配がある。

「ものが、そうして、そこに在る」という「もの」の在り方は、「もの」の息遣いのような気配を感じさせる。

しかし、気配など、手に触れることもできない。いくら眼を凝らしても何も見えない。匂いもない。確かなことは何もない。気配は個人的な感覚の領域から抜け出してはこないからである。それでも「もの」の存在が人の感情を動かすのは、必ずそこに微かな気配が立ち上っているのではないだろうか。

気配を感じる為の指針となるものは、私自身の内にある感触である。ここでの感触とは、身体が外界の刺激を受けて、感じる事だけを示すのではなく、一度受け入れた感触を記憶し、出来事として経験しながら私の中で蓄積された感触である。そうした感触は、「もの」の状態に重ね合わされ、感情移入をしながらその状態を知ろうとする過程の中で、「もの」と私を繋げる役割を持つのである。「もの」の在り方は、自分自身の内にある記憶や経験、場の環境、いくつもの関係が重なって見えているのではないか。そうして視覚と同等に感触によって「もの」を認識する事が可能なのではないだろうか。

本論文「気配の感触」は、「もの」が存在している事実を、私の個人的な感触の眼を指針に、解いていこうとする試行である。「もの」が置かれているといった状況は、「もの」と「場」においてどのような気配を生み出しているか、作品とする「もの」に如何なる気配を持たせていくかを考察する。論文構成は、作品解説を含めながら、私の日常の中に見つけた小さなきっかけを、感触を通して表現に結び付けていくまでを追体験するように論じている。

第1章「水の姿」では、気配に向かう為の指針となる感触について述べている。そして自らの形を保つ事ができない、水の一瞬の姿を形にするまでに現れた様々な感触をあげている。

ここでは、全ての「もの」が置かれているという状況が、「自立できない構造」という共通した性質を持っている事をあげる。こうした性質による「もの」の姿が、私の経験や記憶によって作られた感触と重なり、感情移入しながら「もの」を観て、感じる事が可能になることを説明している。感触による「もの」の姿を読み解く作業は、本論文の基軸になっており、私の表現の土台になっている。

第2章「切り取られた風景」では、作品の解説を含めながら、日常生活の中で切り取られた「風景」を追う。私の日常の中で小さなきっかけから感じた気配のかけらを、日記を記すように作品にした出来事や、表現に結び付けていくまでの過程を述べる。

第3章「気配の型取り」では、私の表現方法の鑄造について述べている。

鑄物の「もの」としての存在は、型に代えて考える事が可能である。「型」には、あらゆる意味や物理的な現象が取り巻き、その中で私は自らの感覚を引き出され、発想を支えられている。型から生まれた「もの」は、形や、素材が移行されただけではなく、型取りという行為によって生み出される気配を伴っているのではないかと。型によって形と共に移行する意識を示した。

第4章「つくること」と「つくられること」では、実際の制作における作業行程を追いながら、私自身の意志が「つくること」と、物質の現象によって「つくられること」の積み重ねが鑄造の過程で止むこと無く続いて起こっていることを述べている。それらは鑄物の表面に凝縮され、複雑に重なった表情が独特の気配を湛える。鑄物の表面性が、「もの」としての存在を支える重要な要素であることを説明している。

私の感触は、素材の物質的な現象を受け入れ、体感する事によって刺激され、常に幅をひろげている。

第5章「ただ鈍くゆっくりと沁みこんだ具合で」では、同名の作品解説を中心に、現時点での最終的な表現の目的へむかう意志を述べている。また、気配を形に含ませたいという意識から、新たな試みとして無垢の鑄物で表現する目的と、表面性の矛盾について考察している。

終章「気配の感触」では、気配を見つけだす為に私自身の意識を向ける方向について述べた。感触は決して不変的でないことを述べ、この全く個人的な道標が導く行方について予想している。

気配は「もの」が存在している事を証明できるのではないだろうか。

私の制作は、そうした「もの」の僅かな気配をつかむことから始まり、その気配を作品に湛えることができた時から表現が成り立つと考えている。気配が私の作品の存在証明をしてくれると思っている。そしてその気配によって、観者が何かを思い出す為のしるしのようなものとして作品をつくりたいと思っている。気配を「もの」から感じ、引き出して表現へ繋げていく行為は私の表現に欠く事はできない。私がつくり出す「もの」には気配は匂いたつのだろうか。

論文を通して私はそうした自問自答をくり返している。表現と私の感触は否定と肯定をただ繰り返していくだけなのかもしれない。しかし、感触という個人的な軸を持ったことによって小さな自由を手にしたように感じている。